



—日本の農業 2—

1. 就農実態調査

全国新規就農相談センターの新規就農者の実態調査(平成22年度)によれば、就農時に苦労した問題は、「農地の確保」を第一に、「資金の確保」、「営農技術の習得」の順となっています。営農技術の習得については、前回調査より指摘率が高くなっており、技術の習得に苦労した人が多くなっている事実がうかがえます。農業研修は、若い年齢層では一般農家や農業法人が、高齢層では公的機関が研修先となっています。特に、農業法人就業の経験の有益性について、就農5年目以上の人では96%がその有益性を認めており、就農後の経験が長くなるほど農業法人での経験が役立っていると報告されています。

2. 新規就農者支援の取り組み

一般に、農村はよそ者には農地を貸し出さない傾向が強いといわれています。

その地域の人々、農業団体、自治体が一体となって地域振興を目指して、新規就農者を受け入れる雰囲気があるところ、就農者も自立への道がひらかれます。農業委員会で支援を実施している事例は、南足柄市、鯖江市、糸島市、浜松市であり、各市の取り組みは①農地権利移動の下限面積以下での農地貸借、②新規就農希望者への営農計画の作成・提出を求める、③地元農業委員による農地の斡旋や農業内容の指導、等です(資料: 全国農業会議所平成24年3月)。農業経営に対しても指導を行っています。

浜松市と甲州市の事例では、農業参入企業に対して、地域農業を通じた地域振興策を期待しています。

3. 米を世界に

「日本のおいしい米を世界に広める」と、南米ウルグアイで米作りに挑んでいる田牧一郎さん(NHK ETV特集)という方がいます。これまで、アメリカカリフォルニア州でコシヒカリの生産をしていました。ウルグアイでは、生産コストは日本の約6分の1です。台湾の卸業者が買い付けに来ていました。意欲ある農業技能者や研究者は、減反政策などで閉塞感のある日本ではなく、求められている新天地、海外での取り組みに期待しています。田牧さんは日本の飲食チェーン店での米飯をみて、米の質の低下と日本人の味覚の鈍化を嘆いていました。いずれウルグアイ産のコシヒカリが輸入される日も来るでしょう。

4. 農業技能の継承

神門善久教授(明治学院大)は、日本の農業にとって土作りから始まる農業耕作技能の低下が最大の危機だと警鐘を鳴らしています。技能の低下は農産物の栄養価の低下に現れ、たい肥作りの劣化、病害虫発生の対処能力が落ちているといいます。神門教授の紹介する農業名人は、高齢となり、亡くなっている人もおり、宝のような技能の継承が問題です。放射能汚染の被害地は、技術の継承が出来ずに荒地となっています。

大規模農家の季節労働では、外国人労働者が不可欠の存在です。輸入農産物は品質よりも価格が優先されています。健康な生活のために、安全で、出来ればおいしい作物を確保するために、国民は多様な問題を含み、国の在りように係る農業について、自分の事として捉えていくべきでしょう。

○参照 「日本農業への正しい絶望法」2012 神門善久 新潮社